

麻布大学第14回学術展示 馬具展 II 「馬の足を護る道具たち」展の記録

*A Record of the Academic Exhibition of Azabu University, No. 14:
Harness, II, Protectors for Legs and Hooves*

高槻 成紀

麻布大学, 獣医学部, 動物応用科学科, 野生動物学研究室

Seiki Takatsuki

Laboratory of Wildlife Ecology and Conservation, School of Veterinary Medicine, Azabu University,
Fuchinobe 1-17-71, Sagamihara, Kanagawa 229-850, Japan

Abstract: Mr. K. Orisaka, a graduate of Azabu University, donated many precious Japanese traditional horse harnesses in 2009. We presented an exhibition of medical equipments for horses in 2009, and we mounted another exhibition to show equipment for protecting horse legs and hooves from January 23rd to May 16th, 2014. Mr. Orisaka emphasized the importance of “slippers” to stop hooves slipping on ice (crampons) and showshoes to prevent them sinking into snow. The exhibition also showed “horse bells”. Mr. Orisaka emphasized the uniqueness of *Oozone* which makes sounds by touching horse bells or metal rings. These collections will be preserved at Azabu University Museum.

2009年に折坂金弘氏から寄贈されたのを機に「馬を治す道具たち」展を開催した。折坂馬具コレクションはこのほかにも多様な内容を含み、5年ほど経ったので、馬具展 II として2014年1月23日から5月16日にかけて「馬の足を護る道具たち」展を開催した。以下はその記録である。

経緯など

「馬を治す道具たち」展の際には折坂氏にアドバイスを頂いたので、今回も連絡をとったが、思いもかけないことにそのひと月前に他界されたとのことであった。痛恨のことであったが、そのことを「展示にあたって」に記述した。展示の内容は2群とし、ひとつは蹄関連の護蹄具類、もうひとつは馬鈴類とした。折坂氏から直接のアドバイスを頂けないことになったが、資料についての記述が残されていたので、それら

を参考に記載をした。

展示

展示では左側に趣意などを置き、次いで護蹄具を、右側に馬鈴類を置いた(図1)。護蹄具にはアクリル製の馬の「足」を作り、蹄鉄や草鞋を「履かせる」ようにした(図4)。また馬鈴類は馬の体を形どった板を作り、これに鈴類を付けた。

以下は解説である。

解説

1 人とウマ

家畜の代表は何であろうか？ 見解はいろいろあるが、イヌ、ネコ、ウシ、ウマははずせないだろう。国によってヒツジやブタ、トナカイ、ラマ、あるいはウサギやモルモットなどが重要であることもあるが、上



図1 展示の全体

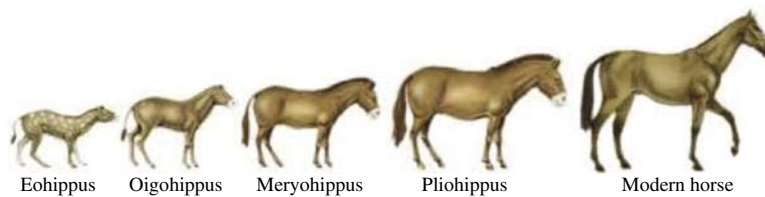


図2 馬の進化

(<http://horsejumper.edublogs.org/2011/03/13/horse-evolution-and-brief-history/> より)

記4種の評価は多くの認めるところであろう。このうちイヌとネコはペットであって、狭義の家畜は、生産動物であるウシやウマを指す。ウシとウマは家畜の双壁といえるが、その最大の特徴は大きいことにある。大きいことはたとえば、人にできない力仕事を可能にする。現代では機械力に依存的になっているために、工事は機械を使うのが当然のように感じるようになったが、人類史を振り返れば、それは「つい最近」である。人類史のほとんどの期間は使役に家畜を使ってきたことを忘れてはいけない。現代の重機は牛馬の延長線上にあるのである。

同じ使役獣でもウシとウマは大きく違う。ウシは力があるが、動きが緩慢である。反芻獣であるから、粗食に耐え、食物を長い時間をかけて消化し、粘性で臭い糞をする。これに対してウマはなんといっても速く走ることができる。食物の消化は速く、消化率が低いから、馬の糞はパサパサしてあまり臭くない。このような違いはウシもウマも農業に使われたが、ウシは使役とともに糞を堆肥作りに用いられたのに対して、ウマは使役のほか、移動、運搬に使われるという違いになった。トラクターも自動車もなかった時代、ウマがどれだけありがたい動物であったかは現代人には想像がむずかしい。

ウマの走力は軍事において最も象徴的に発揮された。歩兵と騎馬兵では戦さにならなかつた。ウマそのものの走力、大きさが、車輪付きの道具と組合わさったときの運搬力、弓矢や槍などの武具と組合わさったときの破壊力は想像を絶するものだった。モンゴルがユーラシアを席卷したのも、スペイン軍が2桁以上も人数の多いマヤの軍隊に易々と勝利したのも、軍馬がいてこそこのことであった。かくして時代を経るにつれて、ウシは農民の家畜に、ウマは軍隊の家畜に変容していった。戦さの在り方がまったく違っていた平安貴族が乗ったのは牛車であったが、近代戦のリーダーたる明治天皇が乗ったのは白馬であったのは、このことを象徴している。

2 護蹄具類

馬蹄

ウマの進化をたどれば、ウマの生息地は森林から草原に変化し、その過程で5本指であったヒラコテリウム (*Hyracotherium*, エオヒップス *Eohippus* とよばれる) が、指数を3とし、ついには1本となったことがわかる。そしてウマは大型化し、究極の「走る獣」となった。指数の減少は体重の分散を集中し、推進力を増したのである(図2)。

したがってウマにとって走ることは極めて重要であり、それを可能にする脚と足はウマの命とさえいえる重要な部位である。そのため家畜化したウマの管理の中でも足には特別の配慮がなされた。その典型が蹄鉄である。蹄鉄はウマの蹄の摩滅を防ぐため、蹄の底部に付けるU字型の金属板であり、蹄と蹄鉄は釘によって固定される。鍛冶屋の仕事の中で蹄鉄作りと馬蹄へのとりつけは重要な位置を占めていた。

理解を助けるためにシマウマの蹄を展示した（図3）。

沓

大切なウマの蹄を護るために日本では藁で作る^{わらじ}草鞋が使われた。足に履かせる具のことを広く沓^{くつ}といい、折坂氏この場合は「わらじ」と読ませている。これはいうまでもなく、人の草鞋をウマ用に変形させたものであり、稲作民族らしい発想であろう。

牛馬の草鞋については、木製、石製、金属製の民俗資料などと違い、劣化しやすいためあまり残されてお

らず、研究も進んでいない。しかも牛馬の減少のため、実際に家畜用の草鞋を作ることのできる人もいなくなっている。

折坂氏はこの点に着目し、馬産地である岩手県の遠野の古老に会ってウマ用草鞋の作成を実見し、計測などをした（図4）。またウシ用の草鞋と比較して明らかに違うことも発見した。ウマ用草鞋は一回り大きく、長距離を歩くから、使用する藁の量もウシのものよりも1.6倍ある。重い荷を運ばせる場合、すり減るため、牛使いは何足も持っていて、1時間ほど歩くと取り替えたという。

ウシ用はウシの蹄が二本あることから、それに応じて鼻緒（止め紐）が付いている。この部分にはウシの蹄の圧力が強く加わるため、補強用の布が巻いてある。

材料そのものは折坂氏が指摘するように日本独特のものであろうが、ウマの蹄を護りたいという考えはいずれも同じであり、ヨーロッパにもさまざまなウマ沓があるようだ（図5）。



図3 シマウマの蹄



図4 ウマ用の草鞋。展示ではウマの蹄を透明なアクリルで表現した。



図5 ヨーロッパのウマ用のスニーカー（左 http://www.naturalhorsetrim.com/Section_18_full.htm より）とスリッパ（右）



図6 氷上蹄鉄

折坂氏はこうした馬具がいわば消耗品であるがために、研究対象とならなかったこと、そしてウマが日本社会から消滅して行くなかで、草鞋を作る技術も人も失われることを憂えた。これらについては折坂(2004, 2008)に記録がある。

氷上蹄鉄

折坂コレクションには「氷上蹄鉄」がある。これは北国で氷上や雪上でウマが歩くときに滑らないようにするためのもので、明治初期にフランスやドイツから技術導入されたものを、軍が改良したとされる。

氷上蹄鉄は底にスパイク(臍)が付いている(図6)。蹄鉄にスパイクを一体として加工したものと、ねじ込み式のものがあり、後者のほうが加工しやすいので、数は多かったとされる。スパイクではなく、粗いヤスリのような「刻式」蹄鉄もあるようだが、折坂氏の努力にもかかわらず、確保できなかったと記録されている。これらについては折坂(2009)に記録がある。

「十字滑り止め」

馬蹄にスパイクをつける氷上蹄鉄と同じ目的で、十字形の鉄板の下にスパイクを付けた馬具がある(図7)。折坂氏はこれを「カナカンジキ」としているが、カンジキは滑り止めではなく、雪に沈むことを防止するためのものであるから、この呼称はふさわしくない。したがって、ここではこれを「十字滑り止め」とすることとした。十字滑り止めはウマの蹄に草鞋を履かせ、その下に付けて、滑り防止にした。登山のアイ



図7 十字滑り止め

ゼンに相当するといえるだろう。

カンジキ

明治政府に北海道開拓は重要な課題であった。また、日清、日露の戦争において馬の存在はきわめて大きかった。その開拓のためにウマは大きな働きをしたが、そのとき冬期の寒冷の地では氷上蹄鉄が有効であった。

一方、人が雪の中を歩くとき、沈まないように輪カンジキ、あるいは単にカンジキと呼ぶ道具がある。要するに足の着地(雪)面積を広くすることで面積あたりの加重を小さくする工夫である。このことは着地面積の小さい有蹄類においては一層重要な問題であり、人のカンジキをウマに応用したのものがある。

カナカンジキと呼ばれる鉄製の輪(直径23cm)の中に数本のつなぎをつけ、これに藁ひもを巻いたものがあり(図8)、折坂氏はこれを日本独特のものであると考えている。

太平洋戦争が始まると金属が不足となり、鉄製のカンジキが作れなくなったため、藁で代用したものが作られた(図9)。

3 馬の鈴

ウマを健康に保つことは管理上最優先されることで、蹄鉄や草鞋はその例である。またウマを利用するための様々な工夫があり、座るための鞍、足を安定させるためのあぶみ鐙、口にハミをつけ、そこから手綱をつなぐなど、乗馬の基本具が発達した。そうした利便性の追求とともに、必ずしも必要ではないが、楽しみとし

てウマの身につける道具類もさまざまに発達した。

それらは当然、人間の生活で使う道具の延長線上にある。たてがみをさまざまに「カット」したり、結ったり、リボンをつけるなどは理髪の延長線上にあるし、人のヘアスタイルに「ポニーテール（子馬の尻尾）」があるのは象徴的である。ウマの背にかける装飾した布もあるし、鞍や籠にはたいへんに凝ったものもある。これなどは現代の自動車の運転具にさまざまな装飾を施すのと共通の心理であろうが、機械である自動車に比べれば生きているウマにおしゃれをさせるのははるかに思いのこもったものであろう。

折坂氏はそうした装飾品の中でも鈴に関心をもっておられたようだ。上記のさまざまなおしゃれは人もするものをウマにするものであるが、馬鈴はこれに該当するものがない。実用的には馬鈴が鳴ることで、ウマがどこにいるかがわかるということがあったであろうし、オオカミ除けの効果があるという説もある。しかしそのことを離れて、ウマの動きに呼応して鳴る音を

楽しんだという要素もあったものと察せられる。

鈴はウマの動きを利用して音を出すから、頭に付けるもの、首に付けるもの、腰に付けるものがある。頭の下に付ける金属輪群を「大曾根」と呼ぶ。顎から前肢にかけての首の下に紐をつけ、これにドーナツ上のものを通したものを狭義の「馬鈴」という。このほかのいわゆる鈴で、肩につけるものや腰に付けるものがある。

複数の鈴

小さなベル型や鈴型の鈴を多数つけて、それ事態が鳴る音と、鈴がぶつかりあって出る音を産み出した（図10）。鈴は紐の先端や首輪などにつけられた。

大曾根

おおそね 大曾根またはナルワ（鳴る輪）と呼ばれる馬具がある。馬に付けて音を出す道具だが、これは鈴ではない。鈴とは中空で一部が割れた球形の中にそれに当たる小



図8 金カンジキ



図9 藁カンジキ



図10 紐の先につけた鈴（左）と首輪の先につけた鈴

さい金属片などがあって音を発するものであるが、大曾根は輪（リング）が連なっていて、これがぶつかり合っ音を発するものであるから、ナルワのほうがふさわしい呼称といえる（図11）。

「大曾根」はこの馬具を作った愛知県の地名で、陶器を瀬戸物とか唐津と呼んだのと同様である。

折坂氏は馬鈴の研究の中で、16世紀の織田信長の時代に訪日したポルトガルの宣教師フロイスの「フロイスの覚書」の中の記載を紹介している。それによると、フロイスは「われら（ポルトガル）においては頸鈴（ショカリヨ）または鈴（カスカヴェル）をつける、日本では手鼓のような金属片（ソマリア）をつける」と記載しており、このソマリアが大曾根であるとしている。

折坂氏は、これが日本独特のもので世界に例がないとしている。世界に例がないのはあるいは事実かもしれないが、これに限って言えば、馬に音を出す鈴類を付けることに関して、この大曾根がすぐれているとはいえず、これを作ったことが、ほかの馬具の場合のように創意工夫の結果編み出されたすぐれた作品とはい

えないように思う。鈴が球状に切れ込みがあるため、柔らかで暖かい、あるいは大きさによっては涼やかな音を発するのに比べれば、金属輪がぶつかり合っ出すジャラジャラという音はとくに快適な音とは思えない。

「馬鈴」

馬の顎の下から前肢の間を通す紐があり、この紐が貫通するドーナツ状の鈴がある（図12）。これが狭義の「馬鈴」といわれ、これ以外の球形の鈴はただの「鈴」とされることが多い。このドーナツ状の馬鈴は中空であり、その外側には隙間がある。このドーナツの内側に金属球が入っていて、動くとき音を出す。1本の紐に複数の馬鈴をつけ、ときには6、7個も付けることがあるという。

このほか通常の球状で中空、一部に隙間がある鈴があり、これは帯や紐につける（図13）。通常は多数が並んだり、総状になって互いがぶつかって音を出す。

これに関連して、鈴を付けた紐を束ねるのに金属製の座金もある（図14）。鈴がこれに当たって音を出す



図11 リング状の大曾根（左）と円盤状の大曾根



図12 ドーナツ型の馬鈴

図13 大型の鈴



図 14 扇形の座金（左）と円形の座金（中央と右）

効果を狙うこともあったようだ。座金の形は円形を基本として波模様や弧をつけたものなどがある。また座金が扇形のものもある。

馬鈴については折坂（2007）に記録がある。

4 結び

最後に以下のような「結び」を添えた。

* *

折坂馬具コレクションによる「馬を治す道具たち」に次いで「馬の足を護る道具たち」の展示を試みた。このコレクションが価値ある収集品があるのは、収集品を調べ、その背後にある工人なり、所有者なりの精神を読み解いた点にあると思う。その根幹にあるのは、日本の庶民が馬具においてもつねに工夫をし、鎖国のため海外からの情報がない中でも独創性を追求してきたことに対する敬意である。

折坂先輩にお話を伺ったとき、話題が東京大学の話題に及んだ。そのときに折坂先輩がやや強い調子で「東大で難しい研究をしても、現場には役に立たない。麻布大学のような現場の家畜のための人材を産み出さなければ意味がない。」という趣旨の発言をされたのが印象に残っている。私は折坂先輩のそうしたやや反骨ともいえる精神は馬具コレクションにも反映されていると思う。

馬は為政者や軍人が飼育したし、競馬は莫大なお金が動くから、高価で贅を尽くした馬具はいくらでもある。しかし折坂馬具コレクションには治療具、護蹄具、馬鈴など庶民の生活に密着したものが多い。とくに牛馬の草鞋は誰も研究の対象としていなかった。折坂先輩の精神はこれに気づいたときに強く反応したようである。そしてそれまで牛馬の草鞋は同じであるとされていたものを、現地の古老に作ってもらってその違いを発見した。そのことについての記述は面目躍如たるものがある。

本展示を直前にして他界されたことは痛恨のことであった。我々は先輩の精神を学ぶとともに、本学がお預かりした貴重なコレクションを末永く保管して、ご厚意に応えたいものである。この展示を御霊前に捧げ、ご冥福をお祈りしたい。

学術展示委員会 高槻成紀

6 参考文献

- 折坂金弘（2004）江戸時代の護蹄用具・装具について。獣医新報, 57: 69-75.
 折坂金弘（2007）馬鈴の研究. *Hippophile*, 28: 1-7.
 折坂金弘（2008）日本の牛馬用沓（わらじ）・カンジキなど履かせる護蹄史. 自費出版: 1-8.
 折坂金弘（2009）氷上蹄鉄について. 自費出版: 1-6.

資料1. 「展示にあたって」

展示にあたって

本学の卒業生である折坂金弘先輩は馬具を収集するだけでなく、その研究を進められた。学術展示委員会は2009年にその貴重なコレクションを本学に寄贈されたのを機に「馬を治す道具たち」と題して展示をおこなった。この展示は本学の学術展示の初期のものであり、特別展であったモンゴル展を除けば、実質的に初回の展示であったといえる。このときの展示を奥様とご覧になった折坂先輩はたいへんお喜びになり「自分でもこんなにすばらしい展示になるとは思っていなかった」と嬉しげであった。奥様も「なんだかいろいろ集めていたけど、この展示を見るまでよさがわからなかった」と喜んで頂いた。その展示は馬の瀉血のための刀など、治療具に焦点を当てたものとした。

あれから少し時間も経ったし、「折坂馬具コレクション」は治療具以外にも及んでいるので、「馬具点II」としてほかの展示物を紹介したいと思い、ご相談を申し上げようとお自宅にお電話を差し上げた。その電話に出られた奥様の言葉に啞然とした。「先月亡くなりました」。

私は返す言葉が見つからず、どう会話を収めたか覚束ない。本学がお預かりしたコレクションについて、折坂先輩から聞いておくべきことはたくさんあったが、それが果たせなくなってしまった。我々はそれを掘り起こし、この価値あるコレクションを正當に評価すべく努力しなければならないだろう。

このように今回の展示は波乱の幕開けとなった。折坂先輩の直接の解説が聞けないことは心もとないが、追悼の意味を込めて展示をすることとした。

学術展示委員会 高槻成紀

資料2. ポスター

